

令和8年2月10日

ふじみ野市議会
議長 加藤 恵一 様

ふじみ野市議会
青藍会代表 山田 敏夫

青藍会視察研修報告書

ふじみ野市議会青藍会所属8名は、令和8年1月28日から30日まで、熊本県八代市においては、デジタル医療MaaS推進事業について（1月28日）、鹿児島県出水市においては、屋根付き市民ふれあい広場（ウイングドームいずみ）について（1月29日）、鹿児島県霧島市においては、DX推進事業について（1月30日）をテーマとする視察研修会を実施したので、以下の通り報告する。

1. 出席議員

山田 敏夫、小林 憲人、前田 広子、田中 早苗
川島 秀男、鈴木 宏樹、板倉 篤、野口 一也

2. 視察研修先

- (1) 八代市役所 熊本県八代市松江城町 1-25
令和8年1月28日（水） 14:00～15:30
- (2) 出水市役所 鹿児島県出水市緑町 1-3
令和8年1月29日（木） 14:00～15:30
- (3) 霧島市役所 鹿児島県霧島市国分中央 3-45-1
令和8年1月30日（金） 14:00～15:30

3. 視察の目的

(1) 八代市のデジタル医療MaaS推進事業

八代市では、安定した医療サービスの提供を行い、デジタル化の効果を全市で向上させるため、医療MaaS実施に向けてオンライン診療車を導入している。事業導入の経緯や目的、導入効果などを検証するために視察を行った。

(2) 出水市の屋根付き市民ふれあい広場（ウイングドームいずみ）

出水市では、明るく、開放的な多機能空間として、屋根付き市民ふれあい広場（ウイングドームいずみ）を整備している。設置に至った経緯や財源、利用実績等の事例を研修するために視察を行った。

(3) きりしまDX未来図

霧島市では「人とデジタルが織りなす田園都市」の実現を目指して「きりしまDX未来図」を策定している。霧島市が策定している基本方針について「市民等の利便性の向上」や「職員の業務の効率化」など、どのように取り組んでいるかを学ぶために視察を行った。

4. 視察研修の内容

<1> 八代市のデジタル医療MaaS推進事業について

(1) 背景

八代市のデジタル医療M a a Sは、令和2年7月豪雨により坂本町の交通網が寸断され、住民の移動手段が失われた結果、無医地域となったことを契機に始まったものである。

特に高齢者や慢性疾患を抱える住民にとって、通院そのものが大きな負担となり、医療へのアクセス確保が喫緊の課題であった。災害という非常事態を教訓に平時にも有効な医療提供体制を構築する必要が高まり、移動と医療、デジタルを組み合わせた新たな仕組みとして本事業が位置づけられた。

(2) 取り組み

本事業では、医療機器を搭載した診療車両が公民館等を巡回し、対面診療とオンライン診療を組み合わせた医療サービスを提供している。車両は2年間のリース後、市へ譲渡された。オンライン診療の実証は令和4年12月から開始され、主に慢性疾患の患者への診療を基本としている。経費は、国の交付金により1/2が補助され、医師の負担軽減や患者・家族の移動負担軽減といった効果が確認されている。さらに車両は救護や投票所など医療以外の活用も考えられている。

(3) 所感

デジタル医療M a a Sは災害対応から生まれた取り組みであるが、平時においても地域医療の特性を高める有効な手段であると感じた。一方で、費用対効果の検証、電波受信環境の改善、巡回先の駐車スペース確保といった課題もある。特に都市部と中山間地域では条件が異なるため、地域特性に応じた設計が不可欠である。

医療にとどまらず多目的に活用できる点は、公共投資としての価値を高めるものであり、ふじみ野市においても災害時対応や高齢者支援の観点から研究すべき事例であると考ええる。

<2>出水市の屋根付き市民ふれあい広場（ウイングドームいずみ）について

(1) 背景

出水市では、市民の健康増進や交流促進、地域活性化を図るとともに、雨天時でもイベント開催が可能な空間の確保が求められていた。さらに近年の災害対応の重要性を踏まえ、平時は市民交流の拠点、災害時には防災拠点として機能する多目的施設の整備を目的に屋根付き市民ふれあい広場（ウイングドームいずみ）が整備されたものである。

(2) 取り組み

本施設は、国庫補助金を活用しつつ市の財政負担を抑えながら整備され、空調設備を設けない開放型構造とすることで、維持管理費の低減も図られている点が特徴である。日常的には保育園の運動会や遠足、障がい者スポーツ大会、各種イベントなど幅広い用途に活用され、多様な市民が利用できる公共空間として機能している。また防災拠点としての役割を担うため耐震性能を高め、長寿命化を見据えた構造とするなど、安全性と将来負担の軽減にも配慮されている。加えて、猛暑時でも、直射日光を遮り風通しを確保できる点が利用者から高く評価されている。

(3) 所感

視察を通じ、「ウイングドームいずみ」は単なるイベント施設ではなく、市民交流、防災、健康増進、地域活性化を同時に実現する公共空間として整備されている点に大きな意義を感じた。特に整備段階から平時と災害時双方の利用を想定し、財源確保や、維持管理コストの抑制、耐久性への配慮まで総合的に設計されている点は、今後の公共施設整備における重要な視点であると考ええる。加えて猛暑や天候に左右されず、市民が集える空間を確保することは、地域コミュニティ形成やイベント誘致にも寄与し、まちのにぎわい創出にもつながる。今後、本市においても、多世代が安心して利用でき、防災機能も備えた持続可能な公共空間整備の可能性を検討するうえで、多くの示唆を得る視察となった。

< 3 >きりしまDX未来図について

(1) 背景

近年のデジタル技術の推進のスピードは、著しく、新たなデジタル技術を活用した行政サービスの変革が求められている。また国は「全国どこでも誰もが便利で快適に暮らせる社会」を目指し、デジタル田園都市国家構想基本方針を策定した。そのような中、霧島市では、新たなデジタル技術を活用しながら、抜本的に業務を変革するとともに、すべての市民がデジタル技術の恩恵を享受できるよう、デジタル活用の支援や情報格差の是正に取り組み、行政サービスの拡充に努めている。

(2) 取り組み

霧島市では、市民等の利便性の向上と職員の業務の効率化を目指し、DXを通じて①市民サービスの高度化、②スリムで持続可能な自治体経営、③地域産業の成長、④多様な働き方の実現を目標に掲げている。市民や民間事業者、市職員等の庁内外における課題やニーズについて、新たなデジタル技術の活用や地域産業の強みを生かした連携により解決するとともに、新たな産業の創出や人材の循環を生み出すことで、地域の活性化を図る。地域を場所ですなぐのではなく、デジタルで結びつけることで、地域格差の解消や多様な働き方を選択できるデジタル社会を実現している。

また、霧島市では、「きりしまDX未来図」を単なる計画に終わらせず、実際の事業として進めるために、市役所内部の体制作り、業務改革、人材育成、官民連携など複数の課題に同時並行で取り組んでいる。そのためDX施策として①便利・簡単・安心な「eな行政」、②スリムな「eな市役所」、③地域の特性を生かした「eなきりしま」の3分野に整理し進捗を管理している。

(3) 所感

霧島市では、市の財源の活用により、外部から専門IT人材を任用して、各課の職員研修の効果により利用者の視点に合った信頼性の高い行政サービスが構築されたことが評価される。地方自治体では、デジタル人材不足が最も大きな壁であり、霧島市はかなり特徴的で①地元採用人材を活用、エンジニアへ育成、②要件整理～アプリ開発までを実施可能に、③開発効率を約2～5倍に改善といった仕組みを構築している。これは「霧島モデル」と呼ばれ、地方でも高度IT開発が可能な体制をつくる試みである。

現在、国は「自治体DX推進計画」を策定し、デジタル社会の構築に向けて自治体が重点的に取り組むべき事項内容を具体化するとともに、国の政策等を取りまとめた。自治体のDX化は、社会環境の変化からの国の方針もあり、デジタルを活用した変革が必須になってきている。

霧島市DXは「地方都市型DX」の成功例だが、本市では、「生活都市型DX」として応用することが現実的である。特に子育てサービスDX、窓口DX、医療介護連携DX、防災DXは高い応用可能性があると認識した。今後は他の自治体のDX化も参考にしながら、ふじみ野市独自のデジタル化を早急に推進していくべき時期に来ていると感じた。